

令和3年度初任者研修及び新規採用教職員研修開講式  
教育長挨拶

(日時) 令和3年4月2日(金) 13時30分

(場所) 教育研究所 5階 研修ホール

皆さん、こんにちは。教育長の細田でございます。

昨日、辞令を交付され新たな一步を踏み出した皆さんの表情は、希望に満ち溢れています。皆さんを仲間として迎えられたことを大変うれしく思います。

本日は、これから1年間の研修に取り組む皆さんへ、「授業」についてお話をさせていただきます。

ある先生の、小学校一年生国語科「くじらぐも」の授業についてです。現在、さいたま市の小学校はこの教材を扱っている教科書を採択していませんが、有名な教材ですから皆さん達の中には、小学生の時に勉強したと思い出す方も多いでしょう。

さて、この授業で、空を泳ぐくじら雲と運動場の先生と子どもたちの間での掛け合いの場面で、どのせりふが誰のせりふなのか、確認しながら読みを進めていました。ところがある男の子が、くじらのせりふを子どもたちのせりふだと言い出します。彼曰く「雲がしゃべるはずがない」と。事前に「登場人物」の概念を学んでいて、このお話では先生と子どもたち、そしてくじらの三者が登場人物であること、さらに登場人物は「しゃべったり、自分の考えで動いたりするもの」という押さえをしていたので、先生としては、少なからずがっかりする場面でした。そして、次の授業で、今日こそきちんと登場人物の概念を獲得させ、それを足場にこのお話の読みを深めたいと考えた先生は、数あるせりふの中から「さあ、およぐぞ」を取り上げ、誰がしゃべっているのかを尋ねました。登場人物の中で空を泳げるのはくじらだけだから、さすがの男の子も、これはくじらのセリフだと認めざるを得ませんでした。

綿密な教材研究に立脚した丁寧で着実な指導であり、低学年指導のいわば定石でしょう。しかし、別の取組があるのではないかと考えてみました。

「雲がしゃべるはずがない」という男の子の考えに乗ってしまったらどうでしょうか。

「なるほど。そうだよね。雲はしゃべらないよねえ。するとこのせりふは子どもたちのものかなあ」と出てみます。当然前時の授業を覚えている子どもたちは反論してくるでしょう。

「先生何言ってるの。クジラは登場人物だって前の時間に勉強したじゃない」「くじらも登場人物だからしゃべってもいいんだよ」

こうくればしめたもの。さらにボケてやればいいのです。

「でもくじらは雲でしょ。人間じゃないしねえ。それでも登場『人物』なのかなあ」

子どもたちはいよいよムキになって、前のめりに授業に参加してくるでしょう。

「先生、これはお話だからね。人間じゃなくてもいいの！人間じゃない登場人物もいて、しゃべったりするのがお話なの！」

「そうか。お話だから人間じゃなくてもしゃべったりするんだ。ところでさあ、登場人物の『登場』って何？」

「登場はね、登場だよ。出てくるの」

「そうか、出てくるのか。誰かやってみてくれるかなあ」

そう言って一人の子どもを廊下に出し、そこから教室に「登場」してもらいます。子どもは嬉々としてガラリと扉を開け「登場」と大きな声で叫ぶに違いないから、すかさず聞きます。

「あなたが『登場』してきたここは、どんな世界なの？」

「お話の世界だよ。先生」

「お話の世界か。そのお話の世界では、さっきのみんなの考えだと、人間じゃないものもしゃべったりするんだね」

「そうだよ。お話の世界だから、本当の世界とは別なの」

「へえ、お話の世界は、本当の世界とは別の世界なんだ」

「そうだよ。本当の世界とは別の世界だから、くじらもしゃべっていいし登場人物なんだって、さっきから言ってるじゃない」

子どもたちは「さっきから言っている」というが、さっきはそんなことまで言っていなかったのです。それは、先生が敢えて男の子の考えに乗って、ボケて見せたからこそ出てきた新しい考えなのです。そして、それを子どもの側から引き出そうとする点にこの先生のねらいがあるのです。

さて、実は、ここまでは、国語の授業研究会におけるある大学教授の授業評の受け売りです。「暗黙の前提を明示化する」ことをどう扱うかについて、非常に分かりやすく解説してくださっていて、感銘を受けたので皆さんに紹介させていただきました。ここからが、私のメッセージです。

この授業評から、私は皆さんに3点お願いを申し上げます。

一点目は、昨日辞令交付式の式辞でお話した大村はま先生の『教えるということ』の中で語られた「仏の指」つまり「子どもの自らの学び」を引き出すために学び続けてください。授業の真価は、この「くじらぐも」の授業のように、学びに向かって格闘する子どもを見守りながら、気づかれぬようにそっと指を添え「自分の力」で学びをものにさせることができたかどうか問われるものです。そういった授業を実践するためには、学び続けなければなりません。授業を見て学び、見ていただいて学び、課題を指摘していただいて学ぶ。簡単な道のりではありません。絶え間ない授業研究そして周到な準備が必要です。

二点目は、ICTというツールを活用して、自立的な学びを展開するための授業研究も進

めてください。

ITリテラシーは、先輩の先生方よりあなたの方が上かもしれませんが、授業のスキルは、ベテランの先生方には全く敵わないでしょう。ですから、先輩の先生方の授業をたくさん見せていただきそれを参考にICTを活用した取組はどうしたらよいか研究してください。その際、先輩の先生方からICT活用についてご質問をいただいたらどんどんアドバイスしてあげてください。それも大切です。そうやって皆さん達の勤務校にICTを活用した授業実践のために学び合うムーブメントを起こしてください。

三点目は、子どもの発達段階を理解した授業実践をしてください。

私たちは、自分の勤務する学校種の授業研究のみに終始することが多く、異校種の授業を見ることは稀です。しかし、例えば小学校での授業を中学の先生が見れば、入学してくる生徒がどんな学びを経験し、何ができるようになっていてどんな習慣を身につけているかを把握したうえで、中学の授業や教育活動を設計できます。高校の先生が中学校の授業を観に行っても同様です。

また、反対に担当している児童生徒が上級学校に進学してから経験する学びを観て、次のステージでの学びの接続を意識した学習指導が可能になります。

ここで紹介した国語「くじらぐも」の授業実践を例にとっても、子どもたちがどのような学びを通して、物語を紡いでいく世界は、空想の翼をどこまでも自在に飛び回ることができるファンタジーの世界だということに気付いていくのかを知ることになります。子どもたちが学んでいくプロセスを知らずして、よい授業設計はできません。

幸いさいたま市は、小・中・高等・特別支援そして中等教育学校とほぼすべての学校種を設置していますので、ここにいる皆さんは、是非異校種の授業を参観しどんどん意見交換をしてください。素晴らしい気づきがあります。

皆さんは、これから一年間、仲間と共に研修を進めていきます。様々な研修を通し、互いを高め合い、学び合った仲間との絆や時間は、これからの教職員人生の中でかけがえないものとなるでしょう。

「チームさいたま市教育」として、ポストコロナを生きる子どもたちの輝く未来のために、一緒に頑張りましょう。

結びに、御多用の中、御出席いただきました 豊島 登（とよしま のぼる）さいたま市立小学校校長会会長、並びに 岡野 育弘（おかの いくひろ）さいたま市PTA協議会会長に御礼を申し上げ、私の挨拶といたします。

令和3年4月2日

さいたま市教育委員会教育長 細田 眞由美